

平成のおわりと新しい時代の幕開け

信金中央金庫 地域・中小企業研究所長
松崎 英一

あと2か月で平成が終わろうとしている。

今から約30年前の平成時代の幕開けは、信用金庫業界にとって衝撃的な出来事から始まった。平成元（1989）年1月27日、昭和38（1963）年5月以来、25年余にわたり全国信用金庫連合会（略称：全信連、平成12年10月1日に「信金中央金庫」に名称変更）の会長職を務めてきた小原鐵五郎会長が死亡退任した。享年89歳であった。

小原会長が逝去した平成元年1月27日は、奇しくも小原会長が全信連会長に就任の昭和38年に発表した5大構想のうち、ただ一つだけ実現していなかった全信連債券の発行が、金融制度調査会の第一委員会作業部会で認められた記念すべき日であった。その後、全信連債券については、平成元年6月に信用金庫法改正により発行が可能になり、同年12月に第1回債が発行された。

平成のはじまりは、信用金庫業界に長期の調達手段の道が開かれ、全信連にとって会員外からの資金調達が可能になったことなど、その後の信用金庫業界の発展につながる大きな一歩を踏み出した年でもあった。

私が入庫したのは、その3年前の昭和61年4月である。当時、社内誌「連友」は月刊で発行され、毎年1月号は職員による小原会長への新春インタビューが巻頭に掲載されていた。私は、幸運にも新入職員の年に聞き手の4人のうちの一人に選ばれ、直接小原会長にお会いし、インタビューする機会を持つことができた。インタビューの内容は、連友の昭和62年1月号に掲載され、今でもその冊子は手元に大切に保管している。

新春インタビューでは、私から「経済および金融の見通し」、「国際化への対応」、「新しい時代に向かって職員に望むこと」という3つの質問をさせていただいた。このうちの最後の質問に対する小原会長の発言が最も印象に残っているので、この場を借りて紹介したい。

「全信連は信用金庫にとって親金庫ですね。去年の営業店長会議でも申し上げたことですが、各地で、管内の信用金庫の人たちが集まるようなとき、全信連の営業店長であれば、いろんな問題を研究していて、機会があればみんなが『なるほど』と思えるような講演ぐらいできる立派な指導者になってほしいと思います。（中略）私は、全信連が将来非常に大きなものになるんじゃないかと思っていますよ。それだけに信用金庫をリードしていくだけの勉強をして能力を高めてもらいたいと思っています。ですから若い人は、『ひとつこれからはオレが全信

連を背負って立つ』くらいの意気込みでないといけないですね。それだけの信念と自信をもってやってもらわないといけないと思います。」

そして、小原会長の発言の最後の部分は、この新春インタビューの巻頭に、「信念と自信をもって行動してほしい」という見出しにもなった。

それから四半世紀近くが経ち、私は平成23年4月から26年6月まで3年2か月間、茨城県、埼玉県、千葉県、神奈川県、山梨県を担当する営業店長として任務に就いた。その在任期間に、信用金庫との会議や勉強会などで話をする機会をいただくことが多かった。

現在は、地域・中小企業研究所の所長として全国各地を訪問し、信用金庫取引先向け講演会、信用金庫が設置する大学の寄附講座、信用金庫役職員向け勉強会などの講師になって、地域や中小企業に関連したテーマや、信用金庫の動向等について講演させていただいている。中小企業経営者や信用金庫役職員の業務上の参考情報や、これから社会に羽ばたく若い世代に対して、信用金庫業界に興味を抱いてもらえるようなことを、研究員とともに調査・研究した成果をもとに話をしている。

平成のおわりに近づいた今、この約30年間を振り返ると、小原会長からのメッセージは、私が信用金庫のセントラルバンクの職員として働くうえで、大きな指針になったと感じている。仕事に取り組む際に、目の前の事象だけではなく、外部ネットワークを活用し幅広く情報を集め、様々な視点で研究し、最適な結論を導き出すように努めた。また、実社会で働くうえで大切なことは理論と実践のバランスであり、いずれに偏ってもよい結果は生まれない。理論を学び日常業務の中で培った経験と組み合わせることで仕事に活かすように努力した。

小原会長の「私は、全信連が将来非常に大きなものになるんじゃないかと思っていますよ。」という発言どおり、信金中央金庫の業容や機能は、平成時代の約30年間で飛躍的に大きくなった。資金量は、平成元年度末の約10兆3千億円から平成30年12月末には約36兆7千億円と、約3.5倍にもなった。

平成元年にニューヨーク駐在員事務所のみであった海外拠点については、その後、ロンドンに証券現地法人を設立し、香港駐在員事務所、上海駐在員事務所、バンコク駐在員事務所を開設して、米国、欧州、アジアへと活動範囲が広がっている。

また、平成時代に入ると、本格的に金融の自由化が進められ、金融制度改革によって業務の自由化が進展し、アセットマネジメント会社、信託銀行（平成29年9月に解散し、現在は信金中央金庫が信託業務を兼営）、証券会社、ベンチャーキャピタル会社等を子会社として設立し、総合金融グループとして運営している。

あと2か月で改元が行われ、新たな元号の時代がスタートする。さらに来年6月1日に、信金中央金庫は創立70周年を迎える。新しい時代の幕開けにあたって、信念と自信をもって行動できるように、さらに研鑽^{けんさん}を積まなければならないと感じている。